



合川 勇三 (精神科医師)

依存症が家庭に引き起こす諸問題 (上)

「合川先生には、以前一度「依存症からの回復」と「親子の共依存」についてお話しいただきました。先生はクリスチャンの精神科医師として、毎日心の病について扱われているのですが、今日は日頃どんな気持ちで、どんな人たちをケアしているのか、どう治療に当たられているのかをお話しいただけたらと思います。」

合川 私は今、埼玉県の病院で依存症の分野の治療をしています。アルコールとか、薬物の依存症が中心です。

なぜ依存症を専門に選んだかについては、精神科には子どもの精神科である児童精神科という分野があります。児童精神科では虐待のケースが問題になってくることがあります。が、虐待をしているのはだれかということを見ていくと、実は依存症の親たちが虐待をしているケースが多いのです。

―依存症と虐待は関係があるんですか。

合川 ええ、すごく関係があると、診ているとよくわかってきました。実際にアルコールは、家庭内暴力の一番の原因なんです。

―どういふことでしょうか。

合川 お酒を飲むと、普段は穏やかなお父さんやお母さんが人が変わるといふことがよくありますよね。突然怒り出して、奥さんや子どもをなぐってしまふ。虐待をあつかうにしても、虐待されている子どもを治療するのか、それとも親を診るのかと考えた時に、親が変わらないと家庭は変わらないだろうと思いました。一緒に働いていた上司の先生にも「虐待と依存症は非常に密接な関係があるよ。虐待と家庭のことに興味があるなら、依存症を専門にやってみないか」と勧められて、それで専門にしました。

―そうですか。では、虐待と依存症が関係があ

合川 そうです。そこを治療するのが家庭を回復するための近道だと考えています。しかし、実際には簡単なものではありません。

―先生が抱えられた問題で、それでも何とか解決した例があったら、お話しいただけますか。

合川 そうですね。アルコール依存症の女性で子どもをうまく育てられなくなつて、子どもが施設に入ってしまうというケースはよくあります。お母さんが育てられないと、児童相談所に預けられます。だいたいそういう女性は、なかなか思っていることを言えない。ご主人に対して本当は不満があつても言えない。それで、自分でため込んで、最後はお酒を飲んでなんとか折り合いをつける、という生活をしています。

―心のバランスを、お酒を飲んでとっている、ということですか。

合川 そうです。本来は、もっと健康的な方法でストレスを発散したり、ご主人との間で不満があるならば、話し合いをして、ご主人にもちよつと歩み寄ってもらふなどの、工夫と絶え間ない努力が必要ですね。なかなかそれができない方は、どうしてもお酒で解決してしまふ。お酒は簡単な魔法みたいなもので、使えばぱつと解決してしまいます。ただ、何も問題は変わっていないので、ひずみができていろいろな家庭問題が噴出してきます。そこで、入院とか治療をする中で本人が少しずつ愚痴をこぼせるようになり、本音を言うとか、ご主人とある程度ケンカができるようになれば、だいぶ良くなつてきたな、となります。

言いたいことを言えない方の方は、子どものころから言えない環境で育ってきた方が多いですね。たとえば、親がアルコール依存症だと、子どもはひたすら我慢をして、なんとか壊れか

けている家庭のバランスを維持しようとする。―いい子になつてしまふのですね。

合川 ええ。逆に反発してものすごく悪い子になる方もいますが、いい子で育つた方とはにかく自分の意思をほとんど言わないで何十年も生きてきていますので、アルコール依存症になつてしまつたときに、すぐに言いたいことを言えるかというところ、やはり言えない。

―よく、虐待をする親というのは小さいころに自分自身も虐待をされた経験がある、親になつて、やってはいけないと思つていてもやってしまふ、ということ聞いたことがあります。自分自身が抑えてきたものを爆発させてしまふという悪循環なんですか。

合川 そうなんです。実際、子どもの頃に虐待を受けた人が虐待する親になるかというところ、うでない方の方が多いのですが、たまつたストレスを解決する方法のない人はお酒で折り合いをつけるといふ悪循環に陥つてしまいます。健全な方法でストレスを解消するとか、愚痴をこぼすとか、話し合いをするという方向に持つて行く必要があります。なかなかこれが難しく、実際には治療に何年もかかることが多いですね。だいたい依存症の方は、「ノー」と言えない人が多いのです。「ノー」と言えるようになるまで3、4年くらいかかります。ただ、断れるようになった時にはだいたい、飲酒も止まつていたりとか、いろいろなことがいい方向に向かつていくことが多いですね。

―そうすると、性格的になんでも自分の言いたいことを言えて、人とも冗談を飛ばしてうまくやっていける人が依存症になる可能性は少ないということですね。

合川 まあ、そういう明るい社交的な人という

という具体例をお話しただけですか。

合川 アルコール依存症になる方は、お父さんが多いんですが、中年男性のアルコール依存症の方は、ストレスがたまつていても言いたいことを言えないという方が多いですね。男性というのは、何かあると沈黙で攻撃するパターンが多くて、だいたい普段は沈黙しています。会社でいやなことがあつても黙つて耐える。家でも奥さんにいろいろ言われたりしても、黙つて耐えるという方が多いです。それが、お酒を飲んだら一気に爆発してしまうというか、突然人が変わったように暴力をふるいだす。

―そのとき攻撃する対象が自分より弱いものに。

合川 そう、弱い人ですね。本当に酔っぱらうと、体の大きい警察官に向かっていくような人もいますが、だいたい奥さんかお子さんですね。最近よくニュースに出てくるのは、小さい子ども、0歳児とかに対する虐待の問題です。

新聞などを見ると、お父さんは「酔っぱらつていた」とか、「薬物を使つていた」というケースが非常に多くあります。その時でなくとも、実はもともとかなりお酒を飲んだつた、というケースもあります。

一方で、お母さんが虐待するケースもあります。やはり、子どもに関わる時間はお母さんが多いのですが、酔っぱらつてしまふと、どうしてもしらふの時のようにはできない、そこで暴力が出るとか食事を作れないというケースも出てきてしまふ。

―いずれにしても、お酒を飲んで弾みがついて虐待にいたつてしまふことが多いわけですね。そうすると、虐待を防ぐには依存症を解決しなければ希望はないですね。

のも、お酒を飲む機会が多いのでやはりアルコール依存症になつてしまふ可能性はありますが、なんでも「私は悪くない、あいつが悪い」と言う人は、自分はストレスがたまらない、周りがたまると、自分の精神衛生上のことを考えると、ある程度他の人のせいにする必要です。ただ、そればかりやっていけると、嫌われてしまふ。ある程度バランスが必要、両極端は良くないですね。まったく愚痴をこぼさないのも、愚痴ばかりこぼしているのも、バランスが悪い。ほどほどがいいですね。

―では、子育てでどこまで子どもに我慢をさせて、どこまで自分の思いを自由に実現させてやるか、というのはいかがでしょうか。

合川 これは難しいテーマですね。子どもの年代によってかなり変わってきます。小さいころは未熟なので、子どもにある程度譲つてあげて、健全な愛着関係、親しい関係、安心できる関係を作っていくのは必要です。もちろん、親にわざと反抗することなどに対しては毅然とした態度で、「これは我慢しなければいけないよ」と教えることも必要です。しかし、全部親の言うとおりにさせるのではなく、ある程度の年齢になつたら、少しずつ大人として扱う、自由を与えていく、ということは必要だと思います。聖書に「子どもを怒らせてはいけない」「父と母の訓戒に従いなさい」とありますので、そういうバランス感覚をもつていくことが必要だと思います。

―さて、この時代特に目立ってきていることを、少し教えていただきたいのですが。

合川 よく感じるのは、依存症ではないのですが「依存的な人が増えている」ということです。自立して何かやっていくというよりも、だれか